

3 新しい農村中心地計画 —秋田県八郎潟干拓地

1. 地区の概要

戦後の食糧増産対策として、また、生産性及び所得水準の高い新しい農業経営を実現し、日本の新しい農村のモデルづくりを目的に、日本第2の湖であった八郎潟を干拓し、生まれた村が大潟村である。計画は1952年に着手されたが、八郎潟の干拓は江戸後期(文政安政年間)から試みられてきた。地方自治法の特例等に関する特別の法律を制定し、干拓地及び干拓地をとりまく水面から構成される大潟村が誕生したのは、1964年である。村内全域が干拓による陸化された土地であり、全域が海拔-3~4mである。

人口約3,000人、面積170km²の大潟村は将来人口予測によると秋田県内で最も人口減少が少なく、また最も平均年齢が低いことから地方創生のモデルとして国内外から視察が相次いでいる。干拓地の75%は農地であり、残りが集落、施設、その他用地である。2014年に開村50年を迎えた。

大規模、高生産性、生活と生産の分離という「新しい農村のモデル」を実現できたことは、1戸あたりの農地面積が17haで粗収益3300万円であることや、圃場への通勤(!)距離が平均14kmであることが示している。村内で農地の売りが出るとすぐ買い手がつき、しかも干拓地外の2倍以上の価格とすることである。

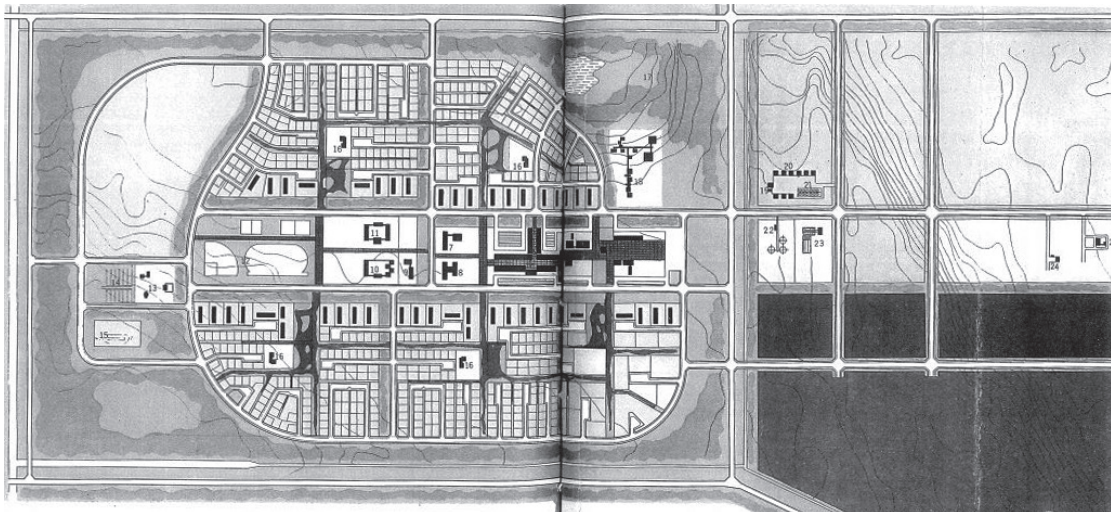
2. 石田先生の関わり

東大博士課程在学中に、高山英華教授から「これはコルホーズだぞ」との言により、八郎潟新農村計画策定に参加することとなった。東秀紀先生の著によると、師の高山英華は、アメリカ式の大規模農業をイメージしていたと言うが、石田先生はソ連のコルホーズ(集団農場)をイメージし、大規模化・共同化による新しい農業・農村を目指した。都市計画学会に設置された集落計画委員会において精力的に検討が行われ、師のもとに石田先生、浦先生、木村先生が参画された。石田先生は以来17年間にわたり、八郎潟の計画づくりに参加し、5万分の1の全体計画図から500分の

1の建物配置計画まで多くの計画づくりに関わった。

計画策定にあたり、先生の中心にあった思想は、「生活の質の向上」である。生活の質の向上のためには、所得と生活環境の向上が必要である。所得の向上のため、営農規模の大規模化及び大型農業機械を共同で所有し共同作業による効率化を図ることを計画した。生活の質の向上には、生産と生活の分離、都市的利便性の提供、景観や生活の質を享受できる市街地を計画した。1957年の農林省案では従来型の農村集落的な分散型配置であったが、都市計画学会での検討により、最終的には総合中心地1箇所を集約することとなった。コンパクトシティの先駆けと言っても良い。中心地計画図にあるよう、中心部の幅200mの公共施設軸の両側に住宅地が配置されており、防風林を兼ねた樹林帯や緑地帯で地区を囲む形態となっている。

石田先生は1981年にご家族で大潟村を訪問しており、その後数年を経て「八郎潟中心地とかけて、別れた妻と解く」の名言を残された。今、先生が大潟村中心地を見られたら、なんと解いたであろうか？



●八郎潟新農村計画・中心地計画図

出典：『SD』No.22(1966.10) 石田頼房「中心地計画」

3. 現地を歩いた印象

2016年7月15日、石田先生と計画づくりを行った木村儀一先生、石田先生のご息をはじめ18人で訪問した。

○大潟村全般について

農家の平均的な農地面積は17haであり、米作中心であるが高い収益率を誇っている。圃場規模も日本離れている。海外からの視察が多いことも頷ける。

入植者の8割は後継者が農業を継続している。米の他はカボチャやメロンを生産しており、こちらも高収益である。



●横線が干拓前の水面を示す表示(左)どこまでも広がる水田

○住宅地について

入植者の宅地面積は500㎡であり上下水道も完備されている。電柱は敷地背後に配置されているため、景観に優れている。また、防風林を兼ねた樹林、街路沿いの花畑(村の花であるサルビア)、生垣により美しい景観が形成されている。クルドサック、緑地帯、歩行者ネットワークにより、安全街区が形成されている(しかし、歩いている人はほとんどいない)。

住宅は積雪地帯であることを考慮した屋根構造とし、敷地内の建物配置や間取りにバリエーションはあるが、統一感のある形態となっている。三角屋根の住宅は全く農家らしくなく、大都市郊外のニュータウン的景観が広がっている。地方の農家出身入植者は、おとぎの国のようなと懐述している。



●住宅地、外周路の景観(左上、右上) 建設中の住宅と立替が進む中、現在も残る当時の住宅(右下、左下は建築当時の様子※)

※大潟村干拓博物館展示物を複写

○都市機能について

役場、医療施設、学校、商業施設がコンパクトにまとまっており、使い勝手がよさそうである。その後の新しい施設や住宅地も供給されるなど、余裕をもった計画となっている。しかし、歩行者には施設相互の距離感があり、事実、歩行者を見かけなかった。

成年は、ほぼ一人で1台の車を持っており、中心商業施設よりは道の駅や村外で買い物をしている。



●中心商店街(左)と道の駅(右)

4. 評価と課題

大潟村は、全国からの入植者を集めて米作を開始した直後に減反政策が始まるなど、食糧管理政策に翻弄された村とのイメージが強い。その大潟村の計画づくりを都市計画家である石田先生が17年間も関わっていたとはつい最近まで知らなかった。大潟村を訪問し、入植者の話を聞き現地を歩いてみると、石田先生の理念である「生活の質の向上」が実現できていることが良く解った。そこには、石田先生を指名した高山英華と理念を共有した木村先生の存在が大きかった。

参加者の主な指摘事項は以下のとおりである。

- ・開発地=自治体領域という住民間の合意形成のしやすさ、中心部のスケール、コンパクトな機能配置性能が実現できた一方、歩行者の距離感に懸念が残る。
- ・村全体としては、後継者が順調に育っている一方、三世同居意識が変化し世帯分離が進んでいることにより、計画意図の伝承・地域の持続性が課題である。
- ・入植当時の建物は一部残っているものの、建替えにより整った景観は壊れつつある。集落景観の変化の進行に対し、もう一度議論し新たなルールづくりの必要性がある。
- ・村は米作により支えられており、高収入を実現しているが、他地域での競争力のある新品種の台頭やTPP後の不透明性など、懸念が無いわけではない。高生産性を実現している村であるが、干拓地であるため農地には限界がある。限られた農地でどのような農業経営を実現するのか、これまでの村の経験を活かしてもらいたい。

今回の訪問は、都市にしる農村にしる「生活の質の向上」を実現するために計画が必要であり、計画家、住民はじめ関係するすべての者が共有、継承することの重要性・有効性を体感できるものであった。日本社会が右肩上がりではない環境の下で、新たな計画理念を構築・共有することが我々に求められている。

かじかわよしみ

梶川義実 / 1983年東京都立大学経済学部卒業。直接の教え子ではないが、卒業後数年を経て入会した「TMU都市と住宅を考える会」の活動を通じて石田先生の警咳に接する。先生の計画した吉祥寺(別稿参照)は通学時によく利用した。現在、(一財)日本立地センターにて産業振興にかかる調査、計画、政策推進業務に携わる。本稿執筆に際し、東秀紀『東京の都市計画家高山英華』を参考にした。同書は我々を八郎潟へといざなった書である。また、現地訪問は、石田先生とともに計画策定をされた木村儀一明治大学元教授に大変お世話になった。記して謝意を表するものである。